

ブラジルにおけるアメリカ南部人移民の植民地経験

——サンパウロ州ヴァーレ・ド・リベイラ地方に着目して——

中西光一（サンパウロ大学歴史学科博士課程）

はじめに

アメリカの南北戦争（1861-1865）の終結は、南部の奴隷主にとって完全無欠であった奴隷制の廃止をもたらした。アメリカの奴隷制は250年近く続き、それは南部社会の本質であったと同時に経済活動の基盤であった。そのため、奴隷制の終焉は世論を大きく賑わせた。特に、奴隷の解放は戦前に構築された白人至上主義社会の崩壊を意味し、「再建」（Reconstruction）の時代に成立した1868年の「合衆国憲法第14修正」と1870年の「合衆国憲法第15修正」は白人と黒人の権力関係の構造を覆した¹⁾。その不可避の帰結に抗するため、一部の白人はブラジルに新天地を求めた。なぜならブラジルは、戦前の南部と同様に、奴隷制が社会構造の土台となっており、白人を頂点とした人種的なヒエラルキーが確立されていたからである（Sutherland 1985: 237-256）。

南部人のブラジル移住は1865年から1869年にかけて実施された。彼らはサンパウロ州、パラナ州、エスピリトサント州、パラナ州で植民地を築いたが、この中でも特にサンパウロ州のノリス植民地（Colônia Norris）が繁栄した。南部人は農業植民活動に従事し、ブラジル社会に多角的な貢献をした。具体的には、南部産の綿花やジョージア州産のスイカ、クルミの栽培を普及させた。その他、彼らはアメリカーナ市（サンパウロ州）の創設、プロテスタント教会とアメリカンスクールの設立にも寄与している（Jones 1967: 319）。ただし、上記の出来事はノリス植民地に限定されており、実際には、その他の植民地に関することはほとんど明らかにされていない。

本稿は、こうした問題への関心から、サンパウロ州ヴァーレ・ド・リベイラ地方（Vale do Ribeira）のシリリッカ植民地（Colônia Xiririca）に着目して、南部人の植民地経験を明らかにする。この点に関する資料として、同植民地に滞在したジョン・ビュフォードの書簡と日記を扱う²⁾。事実、南部人移民に関する先行研究³⁾では、書簡を対象とした分析は皆無に近い。なぜなら、ノリス植民地以外は失敗し、現存する書簡が少ないからである。また、アナ・マリア・コスタ・デ・オリベイラは南部人の子孫たちは、祖先が残した資料に歴史的重要性を見出さず、そのために数多くの南部人の集合的記憶が消失したと指摘している（Oliveira 1995: 2-3）。そうした観点から、本稿で扱う書簡は重要な資料であり、それを手がかりにして、シリリッカ植民地に光を当てたい。

本稿の構成は次の通りである。まず、1章では南部人をブラジルへ導いた歴史的な文脈と植民地の形成過程を概観する。次に2章では先行研究を踏まえつつ、ヴァーレ・ド・リベイラ地方の南部人の動向を整理する。最後に、3章ではジョン・ビュフォードの書簡と日記に焦点を当て、ジェームズ・ガストン⁴⁾のシリリッカ植民地を検証する。

1. ブラジル移住と植民地形成

(1) 調査員の派遣

南部人のブラジル移住の背景にはブラジルの奴隷制にとどまらない複合的な要因が存在していた。それは人種的な要因と経済的な要因であった。人種的な要因としては、奴隷制の廃止によって解放されたアフリカ系アメリカ人への恐怖、嫌悪、彼らによる支配の拒絶が指摘できる。他方、経済的な要因として、南北戦争がもたらした南部経済の崩壊、ブラジル政府による支援とすでに移住していた南部人からの書簡が移住に拍車をかけたことが挙げられる⁵⁾。

また、別の視点に立てば、1865年の後半にサウスカロライナ州出身のジョセフ・アブニーによって創設された南部移民協会 (Southern Immigration Society) も移民活動において重要であった (Harter 1985: 50-51)。同協会は、南部諸州に事務所を設置して、ブラジルの地理的環境、気候、土壌、生態などの自然的条件とブラジルの社会文化的性格の調査のために調査員を派遣した。そして、当地で彼らは移住が円滑に進むよう、調査報告をガイドブックや新聞、書物などに記述し、それらは移住を促進するものとなった⁶⁾。なお、1865年から1866年にかけて、8人の調査員 (表1を参照) がブラジルに派遣された。彼らの活動が功を奏し、南部では「ブラジル・フィーバー」 (Brazil Fever) が起こり、2千人から4千人の南部人がブラジルへ移住したと言われている (Goldman 1972: 10)。

表1 ブラジルへ派遣された調査員 (1865-1866)

氏名	州	調査年	調査地
ランスフォード・ヘースティングズ	アラバマ、テネシーなど	1865/66	パラ州
ウィリアム・ウッド	ミシシッピ		ヴァーレ・ド・リベイラ地方 (サンパウロ州)
ジェームズ・ガストン	テキサスとサウスカロライナ		
ウィリアム・ボウエン	テキサス		
フランク・マクマラン			
バラード・ダン			
ロバート・メリウエザー	南部移民協会 (サウスカロライナ)	1865	サンタ・バルバラ (サンパウロ州)
ヒュー・ショー	アラバマなど		

出典: Oliveira (1995: 98)より筆者作成。注: 南部移民協会の欄に「サウスカロライナ」を加筆修正。

折しも、南部移民協会の活動に呼応して、ブラジル政府は1865年8月にニューヨーク市内で調査員の報告を統括するための事務所を構えた。同所はブラジル人ジャーナリストのクインティノー・ボカイウーヴァの管理下に置かれ、彼は移住の促進のため『ザ・ブラジル・エミグレーション・リポーター (The Brazil Emigration Reporter)』という新聞を創刊し、調査員の報告を積極的にアメリカ社会に発信した (Hill 1932: 241-242)。また、渡航に不可欠であった蒸気船の手配にはジェームズ・フレッチャーが重要な役割を果たした。彼はニューヨーク・リオデジャネイロ間の定期航路網の開設と1865年のユナイテッド・ステーツ・アンド・ブラジル・スチームシップ・カンパニー (United States and Brazil Steamship Company) という船会社の設立に貢

献した。同社の船は年間 12 回往復し、移民の送り出しと同時に郵便物などの輸送も行った。なお、ブラジルへの航路はニューヨーク港を離港して、セント・トーマス島（カリブ海）、ブラジルのパラ州、ペルナンブコ州、バイーア州の順に經由してリオデジャネイロ港に到着するというものであった（Jones 1967: 60）。こうして、様々な準備段階を経てブラジル移住への舵は切られたのである。

(2) 南部人の植民地

次に南部人の植民地について概観しよう。事実、移民活動の興隆に乗じて、ブラジルでは 1865 年から 1867 年にかけて、主に 7 つの植民地（表 2 を参照）が形成された。まず、1865 年に、アラバマ州出身のウィリアム・ハッチンソン・ノリスとその息子ロバートらがサンパウロ州のサンタバーバラ・ド・オエステでノリス植民地（①）を築いた。続いて、ルイジアナ州出身のバラード・ダンがサンパウロ州南部のヴァーレ・ド・リベイラ地方に、妻のエリザベスの名を冠したリジーランド植民地（②）を構えた。同様に、1866 年には同地方にテキサス州出身のフランク・マクマランのジュキア植民地（③）とジェームズ・ガストンのシリリッカ植民地（④）も築かれた。その他、ルイジアナ州出身のホレス・レインと旧南部連合軍のスウェイン大佐のパラナグアー植民地（⑤）やアラバマ州出身のチャールズ・ガンターのジュパラナン植民地（⑥）、オハイオ州出身のランスフォード・ヘースティングズのサンタレーン植民地（⑦）も存在した。

表 2 ブラジルの南部人移民の構成表（1865-1868）

植民地	時期	リーダーの氏名	移住者数	出身地	移民船
ノリス植民地（①） - サンタバルバラ（サンパウロ州）	1865/67	ウィリアム・ノリス；ロバート・メリウエザー；ヒュー・ショー	800	アラバマ州とその他	「タルタル」や「マルミオン」、その他
リジーランド植民地（②） - ヴァーレ・ド・リベイラ（サンパウロ州）	1867	バラード・ダン	150	ルイジアナ州	「ダービー」
ジュキア植民地（③） - ヴァーレ・ド・リベイラ（サンパウロ州）	1866/67	フランク・マクマラン；ウィリアム・ボウエン	記載なし	テキサス州	「ダービー」と「ノースアメリカ」
シリリッカ植民地（④） - ヴァーレ・ド・リベイラ（サンパウロ州）	1867	ジェームズ・ガストン	7	テキサス州とサウスカロライナ州	「ダービー」と「ノースアメリカ」
パラナグアー植民地（⑤） - パラナグアー湾（パラナ州）	1866	ホレス・レイン；スウェイン大佐	400	ルイジアナ州とミズーリ州	記載なし

ジュパナン植民地 (⑥) - ヴァーレ・ド・ リオドセ (エスピリトサ ント州)	1867	チャールズ・G・ガンター	200/400	アラバマ州	「マルミオン」
サンタレーン植民地 (⑦) - バイショ・アマ ゾーナス (パラ州)	1867/68	ランスフォード・ヘース ティングズ	109/200	アラバマ州 とテネシー 州	「レッド・ガント レット」と「サウ スアメリカ」

出典：Oliveira (1995: 110-111)より筆者が加工・作成。

このようにして、南部人の植民地活動はブラジルの各地で展開されたが、その形成過程は千差万別であった。すでに述べたように、上記の植民地の中でも特にノリス植民地（以下、ノリスと略す）が繁栄し、同地の南部人は農業活動を通じてブラジル社会に多角的な貢献をしている。この見方は通説となっているため、先行研究はノリスを顕彰する論考がほとんどである。それゆえ、ノリスを重要視する傾向があり、同地を南部人全体の歴史的経験を象徴した規範的な共同体と解釈する傾向が根強いのである。しかし、そうした姿勢は他の植民地の不可視化あるいは周縁化を進めることに他ならない。そのため、他の植民地を包摂しながら、南部人の植民地経験を分析することが妥当であろう。そうした観点から、次章ではサンパウロ州ヴァーレ・ド・リベイラ地方の植民地に焦点をあてたい。

2. ヴァーレ・ド・リベイラ地方の南部人

本章では、サンパウロ州の南部に位置するヴァーレ・ド・リベイラ地方⁷⁾の南部人植民地の動向を整理する。具体的には、1866年から1867年にかけて、ジュキア市 (Juquiá) 周辺に築かれたバラード・ダンのリジーランド植民地(②)とフランク・マクマランのジュキア植民地(③)である。また、表2に示したように、同地方にはジェームス・ガストンのシリリッカ植民地(④)も築かれたが、この点については次章で詳しく論じる。

それでは、植民地について考察する前にヴァーレ・ド・リベイラ地方の特徴について触れておこう。まず、同地方はリベイラ・デ・イグアッペ川 (Rio Ribeira de Iguape) の流域で知られており、その面積は283万666ヘクタールにも及ぶ。その広大な土地のほとんどは密林で覆われており、南部人の植民地活動が始まった19世紀後半にはインディオの集落やキロンボ (quilombo) が多く点在していた。白人は太平洋に面したイグアッペ (Iguape) やカナネイア (Cananéia)、パラナグア (Paranaguá) といった港湾の町に集住していた。この中でも特にイグアッペは、ヴァーレ・ド・リベイラ地方の経済活動の中心で米作農業が主流であったが、サトウキビやコーヒー栽培も盛んであった。また、同地は南部人の玄関口でもあった。彼らは港から小船に乗って、イグアッペ川を遡って辺境へと旅立ったのである。

(1) リジーランド植民地

まず、リジーランド植民地（以下、リジーランドと略す）のバラード・ダンについて概観しよう。彼はルイジアナ州ニュー・オーリンズ市の出身で南北戦争の以前は同市のセント・フィリップ教会の牧師であった (Goldman 1957: 4)。そして、戦時中は南部連合軍に所属し、戦争の終結とともに、南部の人々が混乱と困難に直面する中で、彼はブラジル移住を余儀なくされた。

そして、表1に示したように、彼はまず調査員として1865年にブラジルへ派遣されている。その後、1866年に、その調査報告を『南部人の国ブラジル—筆者と同じ目的のためにその帝国を訪れた人々がその国で見たことや行ったことについての実践報告』⁸⁾という書物に記述している。同書は、ブラジルの地理、環境、土壌などの自然的条件やブラジル人の宗教や国民性といった社会文化的性格、奴隷制を基盤として歴史的・政治的文脈で繰り広げられている経済活動についてまとめたものである。

ダンは1865年にブラジルに到着後、エスピリトサント州とリオデジャネイロ州で最初の調査を行ったが、そこは地価が高く、かつ面積も小さかったため、サンパウロ州のヴァーレ・ド・リベイラ地方へ向かった。そこで、ジュキア市周辺の土地を見て、そこは値段も安く土地の素質がエスピリトサント州やリオ州のものより優れていたため、同地の購入に至ったのである。その後、リジーランドには150人の南部人が居住し、彼らは綿花、砂糖、タバコ、コーヒーの栽培に従事した (Goldman 1957: 4-7)。

しかし、彼らの植民地活動への意欲は、活動が進展するにつれ減退し、軌道に乗ることはなかった。事実、リジーランドの土地が良好であるというダンの推測は彼の思い込みにすぎなかった。その土地は、実際には農業に適しておらず、雨が降ると土地の半分が浸水するという非生産的な土地であった。それゆえ、ダンは一打策として土地を担保に入れて、4000ドルの借金をした。そして、新しい移民を迎えにアメリカへ帰ると言い残してリジーランドを後にするが、二度とその姿を見せることはなかった。その後、リーダーによって入植の夢を打ち砕かれてしまった南部人は、耐性もなく飢えに苦しみ、彼らのほとんどは他の南部人植民地に向かった (Goldman 1957: 18)。こうして、リジーランドは終わりを迎えたのである。

(2) ジュキア植民地

次に、フランク・マクマランのジュキア植民地 (以下、ジュキアと略す) について考察する。先述の表1で示したように、マクマランはダンと同様に、1865年に調査員としてブラジルに派遣されており、現地で植民地活動の先鞭をつけた。そして、帰国後には地元のテキサス州でブラジル移住を斡旋し、それによって約140人が集まったと言われている。その後、彼は「ダービー」という名の移民船を借りて、1866年1月24日に、ブラジルに向けてテキサス州のガルベストン港から出航した。船内で、マクマランは南部人にポルトガル語を教えて、ブラジルへの旅は滞りなく進むと思われた。しかし、出航から数日後、メキシコ湾を航海中に嵐が発生し、状況は一変した。強風で船はキューバまでに流されてしまい、真夜中に海岸沿いに並んでいる巨大な岩石に船は衝突し、浸水してしまった。南部人は、浜辺へ避難することができたが、荷物や食糧などが流されてしまったため、悲惨な状況に置かれた (Goldman 1957: 9-12)。

この状況下で、南部人に救いの手を差し伸べたのがキューバ人のヴェルネであった。彼は、島の奥地で難波船のことを聞き付けて、南部人の救助に駆けつけたのである。そして、南部人の体調や住環境を憂慮して、南部人を自身の大農園に招待し、敷地内の建物を宿舎として彼らに与えた。そこに彼らは1年以上にわたって滞在した。その間、ヴェルネは南部人に十分な食糧も提供したのである。他方、マクマランはキューバからブラジルに向かうための新しい船を求めて首都ハバナに向かうが、それを見つけることができなかった。そのため、彼はニューヨークに向かい、そこで南部人をハバナからニューヨークへ連れて行くための蒸気船を手配し、その後ニューヨークからブラジルへはユナイテッド・ステーツ・アンド・ブラジル・スチームシップ・カンパニーの定期船を利用することにしたのである。それによって、1867年3月10日に南部人は「マリポザ」に乗船して、ニューヨークに向けてハバナを後にした。ニューヨークに到着後、南部人は数日間の休養をとり、同年の4月22日に「ノースアメリカ」に乗船して、リオデジャネイロに向けてニューヨーク港を出航した (Goldman 1957: 12-13)。

リオデジャネイロへの船旅は1ヶ月間かかり、その時は嵐も発生せず、南部人は無事にブラジルにたどり着くことができた。その後、彼らはリオデジャネイロのホテルに数日間にわたっ

て滞在したあとにジュキアに向けて、最後の船旅に乗り出した。そして、1867年6月に彼らはジュキアにたどり着くことができたのである（Goldman 1957: 14）。このようにして、マクマランの率いる南部人のブラジル移住は紆余曲折を経て実現したのであるが、その後さらなる不幸が彼らにのしかかる。植民地活動が始動した直後に、マクマランが同年9月29日に持病で命を落としてしまうのである。ゆえに、マクマランの後継者争いが起こり、ジュキアでは同床異夢的な状況がしばしば起こった。この後継者争いは、1865年にマクマランと一緒にブラジルを調査したウィリアム・ボウエンとマクマランのおじであったジェームズ・ダイアーの間で起こった。この争いは、数ヶ月間にわたって続いたが、ほとんどの南部人がボウエンに共鳴したため、最終的には彼がジュキアの実権を握った。それによって、ジュキアはボウエンの管理下に置かれて、南部人は状況を刷新して植民地活動を再開したのである（Griggs 1987: 279-295）。

ただし、ジュキアは前述のリジーランドと同様に、長くは続かなかった。事実、1868年から1872年にかけて、ほとんどの南部人はアメリカに帰国した。その理由は、植民地活動の失敗による幻滅や愛郷心、言語の問題など、多岐に及んでいたと言われている（Griggs 1987: 364-365）。その失敗について、ジュキアを分析したウィリアム・グリッグスは詳述していないが、いくつかの重要な要因を挙げておこう。まず、ジュキアの失敗は、上記のリジーランドの事例と同様に、農業の失敗に起因している。つまり、ジュキアの土地が非生産的で農業に適していなかった点と雨による被害が失敗の原因になったと考えられる。次に、南部人はブラジル社会への同化に対して、非妥協的かつ抑制的な姿勢を示していたと推測できる。すなわち、南部人のほとんどは白人至上主義者であったため、異人種間混淆が進んだブラジル社会に対して嫌悪感を抱いたものと考えられる⁹⁾。そのようなブラジルの社会文化的性格は、南部人の混血への恐怖に拍車をかけ、彼らの植民地活動の意欲を消失させたとも考えられる。

以上のように、本章ではヴァーレ・ド・リベイラ地方のリジーランドとジュキアを概観した。繰り返しになるが、先行研究ではノリスを顕彰する論考がほとんどであり、そうした姿勢は他の植民地の不可視化あるいは周縁化を進めることに他ならない。そのため、他の植民地を包摂しながら、南部人の植民地経験を分析することが必要である。また、本稿の目的は植民地間の比較考察ではないが、表2からも理解できるように、ノリスに定着した南部人の数は他の植民地に比べて圧倒的に多い。ゆえにノリスがブラジル社会に与えた影響が強く、その重要性において他の植民地を上回ったという事実は十分理解できる。けれども、数の多寡にとらわれず移民現象を巨視的に考察する姿勢が大事で、その全体像を明らかにすることが重要であるという点を強調したい。そして、南北戦争という「負の記憶」を南部人の共通性と認識しつつ、彼らの植民地経験の全体像を紐解くことが重要なのである。次章では、これまで先行研究で明らかにされていない、シリリッカ植民地を検証する。

3. シリリッカの植民地経験

前章では、先行研究を通じて、リジーランドとジュキアの動向を整理した。ここでは、ジョン・ビュフォードの書簡と日記に焦点を当て、ジェームズ・ガストンのシリリッカ植民地（以下、シリリッカと略す）を検証する。実のところ、シリリッカに関する研究は皆無に近い。従来の研究では、同地に関しては地名とそのリーダーであったガストンのことしかわかっていない状態である。そのため、シリリッカは、リジーランドとジュキアよりも知られていないのである。従って、シリリッカを考察することで、南部人の植民地経験の理解に新たな視点を与えられると考えられる。

まず、ビュフォードがブラジルへ移住した理由を概観しよう。彼はアラバマ州出身の南軍の元兵士で、1862年にアラバマ州の歩兵連隊に入隊し、その後1862年のケンタッキーキャンペーンや1863年のチカマウガの戦い、1864年のフランクリン・ナッシュビル方面作戦に参戦した。戦後、彼は南部の壊滅的な状況に失望し、新天地を求めて1867年にブラジルへ単身移住し

た¹⁰⁾。そして、ブラジルへ渡った後は、シリリッカに定住している。本章では、ビューフォードがイグアッペにたどり着いた過程やガストンがビューフォードに送った手紙を手がかりにして、シリリッカがどのようにして生まれ、どのような状況にあったのかについて考えてみたい。

(1) ビュフォードの日記から読み取るイグアッペへの道のり

ビュフォードの日記には、彼がイグアッペにたどり着くまでの旅路が記されている。彼は、1867年12月25日の午前11時半に「ヴィクセン」という蒸気船に乗船して、リオデジャネイロ港からサントス港に向かっている。そして、翌日の26日午後5時にサントスに到着してそこに一晚滞在した。その後、27日の午後4時にサントス港からイグアッペ港に向かい、その翌日の28日午後7時に到着している¹¹⁾。

イグアッペに着いた翌日の29日に、彼は以下のことを日記に記している。

現在のイグアッペは、商業的にあまり重要ではない町であり、そこには小舟が3隻停泊していた。(中略)私は、仲間が目指す目的地まで同行することに同意して、2つの大型の鞆と私の輸送費として5ミルレイスを漕手に払った。カヌーでこの町(イグアッペ)をあとにし、5日間の旅へと出発した¹²⁾。

このように、イグアッペに対するビュフォードの印象は「商業的にあまり重要ではない」というもので、彼は同市をあまり称揚していないことが理解できる。また、彼は「仲間」と一緒にカヌーで旅に出るが、その行き先や経路、仲間については詳述されていない。ともあれ、前章で述べたように、南部人はリベイラ・デ・イグアッペ川を遡って植民地に向かっているため、ビュフォードの経路も同様であったと言えるだろう。また、ビュフォードはガストンについて、「先生(ガストン)は、リベイラ川(リベイラ・デ・イグアッペ川)を約8日間遡ってたどり着いた草原地帯に、家族と一緒に定着した」¹³⁾と記しており、イグアッペからシリリッカまでは舟で約8日間かかったと理解できる。この点、ビュフォードは仲間と一緒に5日間の旅をしているが、その後別の舟で約3日間かけてシリリッカに向かったと推測できる。

(2) シリリッカ植民地について

次に、シリリッカについて考察しよう。まず、表2で示したように、シリリッカはガストンによって1867年に築かれた。その植民者の数は7人であり、リジーランドとジュキアと比較して非常に少ない。さらに、表1からも明らかのように、ガストンは調査員として1865年にブラジルに派遣されており、帰国後には『ブラジルでの家探し—国の農業資源やその他の特徴と住民の風俗習慣』¹⁴⁾という書物を出版している。その後、彼は1867年4月にアメリカを発ってシリリッカへ向かった(Goldman 1957: 6)。ブラジルへの移動には1ヶ月間かかるため、ガストンは少なくとも同年の5月あるいは6月にはシリリッカにたどり着き、植民地活動を始動させたと考えられる。

それでは、シリリッカの南部人はどのような生活を営んでいたのであろうか。まず、以下の手紙を見てみよう。

君のタバコはブラジル式で計測されているため、私の正確な天秤よりはるかに重くなっているであろう。そして、君が望むようにセニョール・アルベスと話をつけて、彼が去った後、君の取り分を測ってくれ。もし、不足があれば私とその分の責任をとる。(中略)セ

ニョール・アルベスは 25 あるいは 30 袋の塩が欲しいので (中略) 彼に売って、その代金は彼の支払金から差し引いてもらいたい。そして、そのお金を出資金として、有効に使ってくれ。(中略) 君のマテの茶葉はまだこちらには届いていないため、私はしばらくここに滞在する予定だ。今夜、ポルト (シリリッカの港) からフィリップが私の荷物を持ってきてくれる¹⁵⁾。

さらに、その 2 日後に送られた以下の手紙にも注目しよう。

昨夜、君のマテの茶葉を積んだ 8 つの船がここに到着し、今日そこに向かう予定だが、時間がかかるため君は失望するに違いない。ベーコンを積んだ船は、君の手紙が届く前に出航した¹⁶⁾。

これらの手紙は、いずれもガストンからビュフォードに送られたもので、その時期は 1868 年の 4 月となっている。先述した通り、シリリッカの植民地活動は 1867 年の 5 月あるいは 6 月に始動したと考えられるが、上記の手紙に書かれた出来事はそれから 10 ヶ月後あるいは 11 ヶ月後のことである。これは、ビュフォードが初めて 1868 年にシリリッカにたどり着いた事実と関係している。そのため、10 ヶ月前あるいは 11 ヶ月前の情報は不明確である。ともあれ、彼の手紙を通じて、シリリッカの南部人の活動を垣間見ることができる。事実、手紙にはタバコ、塩、マテの茶葉、ベーコンといった様々な代物が記されており、特にタバコと塩はブラジル人への売り物となっている。また、マテの茶葉とベーコンについては、それを積んだ船に関する記述が示しているように、恐らくそれらも商品化のためであったと推測できる。ゆえに、南部人は商業に従事していたと考えられる。

続いて、以下の手紙には南部人同士の関係性についてさらに詳しく書かれている。

(中略) ミスター・デュランはネグロの売却の延期を考えており、私はミスター・ネーサンに手紙を送り、君を通じてお金を送るように彼に依頼した (中略) もし、君がミスター・デュランのネグロの男女とその子供の購入を希望するなら、お互いにとって利益となる良い条件を提示しよう。また、私の医療サービスに対して、ファシーナの人々は多額の給料を私に支払ってくれる可能性がある。(中略) 君は私の商務にうんざりしているかもしれないが、私は君への恩義を感じずにはいられない¹⁷⁾。

ビュフォードの手紙は断続的で、南部人の動向を完全に追跡することは非常に困難であるが、この手紙から、南部人同士の関係性について、いくつかの重要な要素を明らかにすることができる。

まず、前述のフィリップに加えて、デュランとネーサンという人物が登場している。とりわけ、デュランは黒人奴隷を所有しており、ガストンは彼の奴隷の購入をビュフォードに持ちかけている。この点から想起されるのは、シリリッカの南部人は代物のほか奴隷の売買もしていたということで、彼らはブラジルの奴隷制の恩恵を受けていたことを示している。事実、リジーランドとジュキアを扱った先行研究には奴隷を所有した南部人への言及は存在しない。ゆえに、シリリッカの南部人が奴隷の売買に従事していた事実から、彼らは新天地ブラジルでもアメリカ南部の戦前的価値であった白人至上主義の思想に依拠していたことが推測され、奴隷の売買はそのような彼らの心情を端的に示していたと言える。

次に、ガストンがファシーナ (Faxina) で医療に従事していた点に注目する。ファシーナはシリリッカから北西へ約 100 キロの場所にあり、現在はイタペバ (Itapeva) として知られている。上記の手紙には、なぜガストンがファシーナに滞在していたのか、その経緯は詳述されていない。しかし、「医療を通じてファシーナの人々は多額の給料を私に支払ってくれる」という内容から、ガストンはファシーナで医師として働きながら商業に従事していたと考えられる。そして、商談に関連する情報や具体的な用件などは手紙に記して、ビュフォードに送っていたに違いない。さらに、手紙の「君は私の商務にうんざりしているかもしれないが、私は君への恩義を感じずにはいられない」という記述から、おそらく幾度となくガストンはビュフォードに指示を出して、それを敢行するビュフォードにガストンは謝意を表していたと考えられる。

このようにして、南部人の商業や医療、奴隷といったさまざまな面が手紙を通じて露わになってきているが、以下の手紙はシリリッカの内部を理解する上で、いくつかの示唆を与えてくれる。

君 (フルウッド) がポルト (シリリッカ港) に到着したことや仕事を探しているということを手紙で知り、君には私が借りている土地で作物の栽培の仕事をしてもらいたい。この仕事は、以前に君に提案したものよりは儲からないが、私たちに有益な結果をもたらしてくれることは間違いない。(中略) お互いの利益のために、君には私のポルトの土地の責任者になってもらいたい。そして、契約労働者あるいは誰かを雇って、土地を整地し、その後にトウモロコシとエンドウマメの栽培に取り組んでほしい。また、生姜も儲かるので、もし栽培が済んでいないなら、それにも取りかかって欲しい。(中略) もし、ミスター・ビュフォードが家の近くの土地で生姜やエンドウマメ、トウモロコシの栽培を行っていなかった場合、給料は私が出すのですぐに労働者を雇って仕事に取り組んで欲しい。さらに、貨物が周囲の土地に侵入したり、家の敷地内に家畜が入ったりすることを防ぐために、フェンスを張る必要があるため、ミスター・ビュフォードが君に手を貸してくれるだろう。私は、乾物を売るための土地を確保するかもしれないので、君と一緒にブランビーをポルトに配置するかもしれないが、それについてはまた話し合おう¹⁸⁾。

この手紙にはシリリッカに関することやフルウッド、ガストンの妻、ブランビーといった新たな人物が登場している。とりわけ、シリリッカには2つの土地が存在していたことが理解できる。ひとつは、借地としてフルウッドに付与された土地で、もう一つはビュフォードの管理下にあった土地であった。これらの土地はいずれもポルト (シリリッカ港) の周辺に位置していたと考えられるが、特に強調しておかなければならない点は、農地であったという事実と、南部人はその土地でトウモロコシやエンドウマメ、生姜などの農産物を商品化のために栽培し、彼らは当地の市場経済のなかに組み込まれていたという点である。換言すれば、シリリッカの南部人は自給生産のための農業植民活動に従事せず、当地の社会形態に適合してブラジル人と融和的な関係を構築していたということである。そのような南部人の構築的性格は、ブラジル人労働者の雇用や先述のセニョール・アルベスの取引にも顕著に表れている。

さらに、シリリッカに在住していた南部人の数がきわめて少なかったという点にも注目したい。すでに述べたように、シリリッカの数は、同じ地域に築かれたリジーランドとジュキアと比較しても非常に少なかった。また、ジュキアを鑑みれば、言語の問題などから植民地活動は長くは続かなかったが、シリリッカの南部人はブラジル人との取引を行い、ガストンはファシーナで医療に従事していた。そうした観点から、シリリッカの数が少なかったことは、彼らのブラジル社会への適応を助長したと考えられる。

こうしたブラジル人との関係は以下の手紙においてさらに垣間見ることができる。

イグアペのベーコンが安いという知らせを受けて、(中略) 豚肉を安価で手に入れるために売り手と交渉を進める必要があるが、なるべくセニョール・ヴィトとセニョール・アルーダの肉を長さで計って安く仕入れて欲しい。そして、その肉を缶詰にしたいと私は考えている。そうすれば、手元に置いておけるし、肉を出荷するまで保管できる。現在のイグアペのベーコンの価格を考えると、ポルトでは1アローバを4ミルレイス以上では売ってはならない¹⁹⁾。

この手紙から見えてくるのは、ガストンがイグアペの市場経済に精通し、食品の価格変動や物流管理について理解していたということである。事実、シリリッカにとってイグアペは経済活動の中心地であった。ガブリエラ・セガハ・マルチンス・パエスの分析では、19世紀後半のシリリッカ周辺の商人は、リベイラ・デ・イグアペ川を通じて、各地で生産されたほとんどすべての農産物や畜産物をイグアペに出荷していたことが指摘されている (Paes 2014: 39, 45)。そうした観点から、ガストンがイグアペの経済事情やあらゆる面に注目していた理由が理解できる。このような事実を考慮して、シリリッカの戦略を再考すると、彼らはイグアペの市場向けに、前述のトウモロコシ、エンドウマメ、生姜、乾物といったあらゆる種類の農産物の栽培を行っていたと考えられる。同様に、ベーコン、マテの茶葉、タバコの確保も、イグアペ向けの商品とするためであったと言えるだろう。

このようにして、シリリッカで商品を蓄積し、イグアペの市場へ出荷して収益を得ることが南部人が目指した路線であった。けれども、やがてシリリッカは衰退の一途をたどることになる。まず、その点については以下の手紙で見てみよう。

マットグロッソへの旅について、セニョール・サン・ペドロが君の同伴を喜んで受け入れると、セニョール・ジョオン・バルボサが手紙に書いていた。そして、マットグロッソへの旅は8ヶ月あるいは10ヶ月はかかるだろうと、彼(セニョール・サン・ペドロ)は言っていた²⁰⁾。

この一通は、ガストンからビュフォードへ送られたもので、具体的な旅の目的は記されていない。マットグロッソ (Mato Grosso) とはブラジルの中西部に位置する州であり、先行研究を踏まえても、同州に南部人が定着したという記述は存在しない。ともあれ、ビュフォードは何らかの理由でブラジル人を同伴してシリリッカを後にし、別の新天地を求めていたのかもしれない。以下の手紙にはシリリッカから別の地域へ移った南部人のことが記されている。

マットグロッソへの旅について、君に手紙を2通送ったが、セニョール・ルカ・デ・サン・ペドロは来週の3日まで出発しないつもりだ。おそらくその日より、さらに数日間の遅れも生じるかもしれない。そのため、私の馬はまだ君のものだ。ミスター・デュランは6週間以内に家族と一緒にカーサ・ブランカへ移る予定だ。バーズリー医師が君にメッセージを送り、彼は25日に出発する予定で(中略) 君と一緒に来てくれることを望んでいる。ミスター・デュランによると、バーズリー医師のタトゥアイでの成功の見込みは高く、医師はすでに資金の調達を進めているという²¹⁾。

この手紙にはビュフォードのマットグロッソへの出発日の延期やミスター・デュランの移住、

バーンズリー医師という人物のことが記されている。とりわけ、ビュフォードはマトグロッソへ向かうことになっているが、同時にバーンズリー医師がタトゥアイ (Tatuai) への彼の同伴を望んでいる点については、ビュフォードがペドロとバーンズリー医師と何らかの利害関係を持っていたことを意味し、そこにはビュフォードの複雑な心情が示されている。また、タトゥアイとはシリリッカから北へ約 130 キロの場所にあり、現在はタトゥイー (Tatuí) として知られている。

他方、デュランとその家族が「カーサ・ブランカ」に移るという点について、手紙には具体的なことは記されていない。ともあれ、タトゥアイへの移住を促したバーンズリーについて考察する必要がある。事実、彼は本来ジュキアに定着するためにブラジルへ移住している (Dawsey and Dawsey 1995: 24)。しかし、前章で論じたように、マクマランの死によってジュキアの退廃化が進んだため、おそらく彼は他の行き先について思いを巡らしたに違いない。そのなかでタトゥアイを発見して、移住への過程で、彼はビュフォードと何らかの形で接触したと考えられる。実のところ、ジュキアはシリリッカから南西へ約 50 キロの場所に位置しており、地理的にさほど離れていない。そのため、バーンズリーが自ら植民地の情報を得て、シリリッカへ向かったとも推測できる。

この状況下に、ガストンはどのような反応を示していたのだろうか。ガストンからビュフォードへの次の手紙に注目してみよう。

ミスター・デュランの家族は元気で、彼らは 2、3 週間の間にサン・シマンに向かう予定だ。そこで彼らは良い土地を手にし、ビジネスに協力してくれる友人もいるようだ。孤立を和らげるために、デュラン家とは毎日のように交流していたため、彼らの出発に際して寂しい気持ちでいっぱいである。ここ (ファシーナ) ではセニョール・ルカ・デ・サン・ペドロが不在で、医療活動の見通しは順調に思えたが、最近の治療費の支払いが十分ではないため、この先どうなるか分からない状況である²²⁾。

デュランとその家族がサン・シマン (São Simão) に移るため、ガストンが落ち込んでいる様子が上記の手紙から理解できる。また、先述したデュラン家の「カーサ・ブランカ」とは、サン・シマン市内の特定の住居のことであったと考えられる。サン・シマンとはシリリッカから北へ約 350 キロの地点に位置しており、当地に「友人」がいるという事実から、他の南部人も在住していたと推測できる。さらに、手紙にはガストンの医療活動についても記されている。すでに述べたように、彼はファシーナで医療に従事しながらシリリッカで商業の仕事もしていた。しかし、治療費の支払いが十分ではないという内容から、彼は強い不安感を抱いていたと察することができる。この状況下で、シリリッカの状態について記された手紙が以下である。

私は、家とその備品の売却についてセニョール・カンディドと交渉し、彼はすぐにポルトに向かい、その件について君と話し合うつもりだ。ただし、もし他の誰かが適正な価格を提示したら彼を待つ必要はない。また、フルウッドがどのようにして過ごしているのか、彼は将来何をしようと考えているのかについても教えてほしい。(中略) セニョール・シルバーが私への診療代として、1 アローバの塩を君に届けることになっている。(中略) さらに、君はすでにシリリッカのセニョール・ベルナルド・カブラルから 7 桶分の塩を受け取っていると思う。その代物は売り捌いてもいいし、君の思うようにしてくれて良い。(中略) 君の都合の良いときに、いつでも会いに来てくれたら嬉しいよ。そして、せめて今後の君の計画のことを手紙に書いて教えてくれ。もし、私にできることがあれば、遠慮なく言ってくれ²³⁾。

上記の手紙は、様々な解釈が可能である。まず、ガストンは診療代として、金銭だけでなく、食料品を受け取っていたことがわかり、彼の医療活動の一部を垣間見ることができた。しかし、前述の手紙ではガストンが診療代を問題視していることから、その物量は十分ではなかったと推測できる。そのため、ガストンが予想していたほど、ファシーナの人々は経済的にゆとりがあったわけではなかったと言えるだろう。次に、ビュフォードがシリリッカの家とその備品の売却の任にあたっていた点について考察する。その家は、おそらく植民地活動のために使用していたものと考えられる。ゆえに、その売却行為は植民地の終焉を示唆していた。そして、その説が支持される理由として以下の2点も喚起される。

第一に、フルウッドとビュフォードの今後のことを気づかうガストンの言葉であり、それは彼らとの決別を意味していた。その後、フルウッドがどのような運命をたどったのかについて手紙は詳述していないが、ビュフォードはマットグロソフへ向かったに違いない。とりわけ、ガストンがビュフォードの来訪を望んでいる点や彼を支え続けたいという意思表示から、両者の間に強い信頼関係があったことは、本章で扱った書簡を見ても明らかである。おそらく、両者の関係は文通を通じて、その後も続いたと考えられる。第二に、リーダーであるガストンもその後、ヴァーレ・ド・リベイラを去っている。事実、彼は家族と一緒にカンピーナスへ移り、そこで医療に従事したと言われている (Goldman 1957: 18)。そのため、彼も植民地活動に見切りをつけたに違いない。

以上、本章ではジョン・ビュフォードの書簡と日記に焦点を当て、シリリッカを検証した。本章での分析の結論として、以下が指摘できる。

まず、シリリッカの南部人は自給生産のための農業植民活動に従事せず、当地の市場経済に参入してブラジル人との融和的な関係を構築していた。また、リーダーであったガストンはファシーナでの医療活動と並行して、シリリッカのビュフォードやフルウッド、その他の南部人と一緒に商業に従事していた。ただし、彼らの活動は持続せず、中断を余儀なくされた。その具体的な理由については、書簡と日記で明らかにされていないが、商業活動における何らかの戦略的失敗があった可能性や、ガストンに反旗を翻した人物が現れて、植民地内部に亀裂をもたらした可能性も考えられる。ともあれ、従来の研究でシリリッカに関することがほとんど明らかにされていなかった状態を考慮すれば、本章の分析は幾分なりともその植民地経験を明らかにしたかと思われる。

次に、シリリッカの南部人がブラジル人との融和的な関係を構築していた点に注目したい。そのような彼らの姿勢は、マシュー・グテールが指摘する南部人の「ヘミスフェリック」(hemispheric)あるいは「コスモポリタン」(cosmopolitan)²⁴⁾な性格に基づいていたと言える。グテールは、戦後にキューバに移住した南部人の分析を通じて、彼らがキューバ人と構築した友好的な関係に着目している。そして、戦前に南部人が奴隷制の擁護を目的にキューバ人と外交上の関係性を強化していた事実を強調し、それが戦後のキューバ移住に帰結したと指摘した (Gutrel 2008: 85-86)。そして、ブラジルの場合は戦時中に南部連合海軍の戦艦がブラジルに停泊することを許可しており、南部はブラジルを好意的に捉えていた (Hill 1932: 153)。そうした観点から、本章のシリリッカの事例においては、キューバと同様に、南部人のコスモポリタンな性格とブラジル人への共感により両者の関係が可能になったと言えるだろう。このような南部人の性格は、今後のブラジルの南部人の植民地経験を探究する上でも、新たな切り口を与えてくれるであろう。

おわりに

本稿の議論をまとめると次のようになる。まず、1章では南部人をブラジルへ導いた歴史的

な文脈と植民地の形成過程を概観し、南部人の植民地活動はブラジルの各地で展開されたことを指摘した。ただし、植民地の中でも特にノリスが繁栄し、先行研究のほとんどはノリスを顕彰する論考であり、そうした姿勢は他の植民地の不可視化あるいは周縁化させることに他ならないという点にも言及した。次に2章では先行研究を踏まえつつ、ヴァーレ・ド・リベイラ地方の南部人の動向を整理した。また、南部人の移民現象を巨視的に考察する姿勢やその全体像を明らかにすること、南北戦争という「負の記憶」を南部人の共通性と認識しつつ、彼らの植民地経験を紐解くことの重要性を説いた。最後に、3章ではジョン・ビュフォードの書簡と日記に焦点を当て、シリリッカを検証した。シリリッカの南部人は自給生産のための農業植民活動に従事せず、当地の市場経済に参入してブラジル人との融和的な関係を構築していた点を明らかにした。そして、彼らのコスモポリタンな面も考慮しながら、今後の南部人の植民地経験を探究する必要性を説いた。

最後に、今後の課題について触れておきたい。本稿の2章で、ジュキアで起こったボウエンとダイアーの後継者争いについて概観した。その結果、ボウエンが植民地の後継者となり、ダイアーは家族とステイブ・ワッソンという人物と一緒に別の地域に移ることを余儀なくされた。実のところ、このワッソンはアフリカ系アメリカ人であり、彼はダイアーの元奴隷であった。従来の研究においては、彼に関する記述はほとんど存在しない。また、ルシアーナ・ブリトは、ブラジルへ移住した彼のようなアフリカ系アメリカ人が、その自由を保護されていたのか否かや再び奴隷にされたのか、人種差別を受けていたのかについて、明らかにされていない点が多いことを指摘している (Brito 2015: 163-164)。そうした観点から、彼のような元奴隷について検証することを、今後の課題としたい。

【注】

1) 南北戦争の終結によって、南部は北部の支配下に置かれる。そして、南部の社会的・政治的な再建が始まり、それは1877年まで続いた。その間、3つの再建期修正 (Reconstruction Amendment) が制定され、1865年12月18日に成立した「合衆国憲法第13修正」はアメリカの奴隷制を公式に廃止した。次に、「合衆国憲法第14修正」が1868年7月9日に成立し、アフリカ系アメリカ人に市民権を与えた。最後に、1870年2月3日に成立した「合衆国憲法第15修正」は、彼らに選挙権を与えたのである。これを機に、アフリカ系アメリカ人の一部は南部の政治に参加することができた。事実、再建期には16人が連邦議員、1人が州知事、6人が副知事に選出されている (Eisenberg 1989: 100)。南北戦争と再建期修正に関する研究については、それぞれ McPherson (1988) と Foner (2019) を参照されたい。

2) 本稿で扱うジョン・ビュフォードの日記と書簡の日本語訳は全て筆者によるものである。資料は、以下の合衆国アラバマ州オーバーン図書館のコンフェデラードス・デジタル・コレクション (Confederados Digital Collection) のウェブサイトで見ることが可能である。日記は1867年のものと書簡は1868年から1869年にかけて記されたものを分析の対象にしている。なお、一部の便箋は損傷が激しく、文字の判読が困難であった。誤った判読を避けるため、筆者は判読に支障がなかった書簡のみを分析の対象としている。Confederados Collections, Auburn University Libraries, Auburn University Special Collections and Archives: <https://www.lib.auburn.edu/archive/find-aid/958.htm> (アクセス2021年8月11日)

3) ブラジルの南部人移民に関する研究については、Hill (1932); Rios (1949); Goldman (1957); Jones (1967); Goldman (1972); Harter (1985); Griggs (1987); Oliveira (1995); Dawsey and Dawsey (1995); Gussi (1997); Zorzetto (2000); Aguiar (2009); Horne (2010); Ribeiro (2011); Silva (2011); Brito (2014); Brito (2015); Brito (2018); 中西 (2020) などがある。

4) ジェームズ・ガストンは、サウスカロライナ州出身の医師で戦時中は軍医として同州の陸軍部隊に所属した。その際、P・G・T・ボーリガード将軍が統括した部隊の医長や外科部長も歴任した。戦後、彼はすぐにブラジル移住を計画し、植民地活動と医療に従事するため1865年に南部をあとにした。ガストンの詳しい経歴については、Brito (2014) を参照されたい。

5) 南部人のブラジル移住にはブラジルの奴隷制に限らず、複合的な要因が関係していた。まず、人種的な要因として、黒人部隊やカーペットバーガー (Carpetbagger) —南部の政治と経済を支配したアフリカ系アメリカ人と北部の白人—、スキヤラワッグ (Scalawag) —北部を支持した南部の白人—によって、南部の白人層は社会的に抑圧された。そのため、一部の南部白人はブラジルへ移住したのである。次に、経済的な要因として、戦時中の北軍は南部のあらゆるインフラと街を破壊して南部の経済基盤を徹底的に破壊した。この状況下で再建は始まったが、経済復興には長い時間を要するため、そのような不安定な状況を前に南部人はブラジル移住を余儀なくされた。この点、南部人のブラジル移住の諸要因については、拙稿 (2020) を参照されたい。

6) 移民活動の大きな誘因として機能したガイドブックや新聞、書物については以下のものが存在する。Hastings (1865); Wood (1866); Dunn (1866); Gaston (1867)。

7) ヴァーレドリベイラ地方の歴史や文化、環境に関する詳しい内容については以下の論考を参照のこと。Paes (2014); Valentin (2006); Queiroz (2006)。

8) 書名の和訳は筆者による。原書については以下のとおりである。Ballard S. Dunn, *Brasil, the Home for Southerners: or, A Practical Account of What the Author, and Others, Who Visited That Country, for the Same Objects, Saw and Did While in That Empire* (New Orleans: Bloomfield & Steel, 1866)。

9) 南部人の人種観に着目したルシアーナ・ブリトは、南部人は異人種間混淆が進んだブラジル社会で多数のアフリカ系ブラジル人が社会的・政治的な地位を享受していたことに衝撃を受けたと指摘している (Brito 2014: 170)。事実、そのような南部人の姿勢は南北戦争以前から黒人を劣等人種とみなした優生学 (eugenics) に起因している。特に、アメリカ人医師サミュエル・ジョージ・モートンを中心にした「アメリカ学派」 (American School of Ethnology) は、人類多元説 (polygenism) を引用し、黒人は古代エジプトの時代から奴隷であり、その従属的な性質は 19 世紀前半の当時まで続いていたと指摘した。(Fredrickson 1971:74-77; Stanton 1960: 24-35, 61-64; Morton 1839)。また、ブラジルを「人種の研究所」と位置付けたルイス・アガシは 1865 年から 1866 年にかけて、ブラジルで人種の研究を行った (Agassiz and Agassiz 1868)。その結果、混淆は白人種の退化に繋がると彼は指摘し、人種隔離の正当性をアメリカ社会に訴えた (Machado 2010: 34-40)。南部の白人にとって、優生学の研究は白人至上主義の思想と奴隷制の正当化に多大な影響を及ぼしたのである。

10) ジョン・ビュフォードは、バージニア州立軍事学校 (Virginia Military Institute) の卒業生であり、彼の経歴については以下のウェブサイトで閲覧が可能である。Virginia Military Institute: <https://archivesweb.vmi.edu/rosters/record.php?ID=1563>。(アクセス 2021 年 8 月 11 日)

11) Dairy of John Ridley Buford, dated December 25, 26, 27 and 28 of 1867, Confederados Collections, Auburn University Special Collections and Archives, Auburn, Alabama.

12) Dairy of John Ridley Buford, dated December 29, 1867, Confederados Collections, Auburn University Special Collections and Archives, Auburn, Alabama.

13) Dairy of John Ridley Buford, dated December 29, 1867, Confederados Collections, Auburn University Special Collections and Archives, Auburn, Alabama.

14) 書名の和訳は筆者による。原書については以下のとおりである。James McFadden Gaston, *Hunting a Home in Brazil: The Agricultural Sources and Other Characteristics of the Country and Also the Manners and Customs of the Inhabitants* (Philadelphia: King and Baird Printers, 1867)。

15) James McFadden Gaston to John Ridley Buford, April 27, 1868, Confederados Collections, Auburn University Special Collections and Archives, Auburn, Alabama.

16) James McFadden Gaston to John Ridley Buford, April 29, 1868, Confederados Collections, Auburn University Special Collections and Archives, Auburn, Alabama.

17) James McFadden Gaston to John Ridley Buford, June 15, 1868, Confederados Collections, Auburn University Special Collections and Archives, Auburn, Alabama.

18) James McFadden Gaston to Fulwood, September 30, 1868, Confederados Collections, Auburn

University Special Collections and Archives, Auburn, Alabama.

19) James McFadden Gaston to John Ridley Buford, October 27, 1868, Confederados Collections, Auburn University Special Collections and Archives, Auburn, Alabama.

20) James McFadden Gaston to John Ridley Buford, February 16, 1869, Confederados Collections, Auburn University Special Collections and Archives, Auburn, Alabama.

21) James McFadden Gaston to John Ridley Buford, February 23, 1869, Confederados Collections, Auburn University Special Collections and Archives, Auburn, Alabama.

22) James McFadden Gaston to John Ridley Buford, March 13, 1869, Confederados Collections, Auburn University Special Collections and Archives, Auburn, Alabama.

23) James McFadden Gaston to John Ridley Buford, March 13, 1869, Confederados Collections, Auburn University Special Collections and Archives, Auburn, Alabama.

24) グテールが指摘する南部人の「ヘミスフェリク」あるいは「コスモポリタン」な性格とは、19世紀前半に奴隷制の国際的な拡大を目的に彼らがラテンアメリカ諸国の奴隷主に示した協調的な姿勢のことである。実のところ、アメリカの黒人奴隷制史の古典的研究のなかで、南部人のコスモポリタンな性格に注目したものはほとんど存在しない。ユージン・ジェノヴェーゼは、南部人の奴隷主は純粹で独立した奴隷制社会を形成していたと指摘し、その他のラテンアメリカ諸国の奴隷主との関係性には注目しなかった (Genovese 1971: 107, 111)。C・ヴァン・ウッドワードも同様に、南部の奴隷制社会の自主性を強調し、南北戦争以前の南部を「封建的空想」(feudal fantasy)に耽けた地域であったと表現した (Woodward 1960: 19, 21, 22)。ケネス・スタンプは、南部人の一部はブラジル、キューバ、プエルトリコ、オランダ領ギアナ (スリナム) といった奴隷制国家と何らかの利害関係を有していたことを指摘したが、その点については詳しく触れていない。ともあれ、スタンプも南部の自主性に注目して、同地は「文化的に孤立していた」(culturally isolated)と述べた (Stampp 1956: 21)。そのため、グテールの分析はブラジルの南部人の移民史研究と南北アメリカの黒人奴隷制史を再考する上でも、示唆を与えてくれるはずである。南北戦争以前の南部とラテンアメリカ諸国の関係については、Gutrel (2008)を参照されたい。

【参考文献】

Agassiz, Louis; Agassiz, Elizabeth Cabot Cary. *A Journey in Brazil*. Boston: Ticknor & Fields, 1868.

Aguiar, Letícia. *Imigrantes Norte-Americanos no Brasil: Mito e Realidade, o Canto de Santa Bárbara*. Dissertação (Mestrado em Ciências Econômicas) - Instituto de Economia, Unicamp, Campinas, 2009.

Brito, Luciana da Cruz. *Impressões norte-americanas sobre escravidão, abolição e relações raciais no Brasil escravista*. Tese (Doutorado em História Social) – Faculdade de Filosofia, Letras e Ciências Humanas, Universidade de São Paulo, São Paulo, 2014.

Brito, Luciana da Cruz. “Um Paraíso Escravista na América do Sul: Raça e Escravidão sob o Olhar de Imigrantes Confederados no Brasil Oitocentista.” *Revista de História Comparada*, Rio de Janeiro, v. 9, n. 1, p. 145-173, 2015.

Brito, Luciana da Cruz. “Perspectivas sobre as Relações Raciais nos Estados Unidos por Meio do Anti-exemplo da Sociedade Brasileira: As Impressões dos Abolicionistas Negros Norte-Americanos e de Imigrantes Confederados.” In: Machado, Maria Helena P. T.; Schwarcz, Lilia M. (Orgs.). *Emancipação, inclusão e exclusão: desafios do passado e do presente*. São Paulo: EDUSP, 2018, v. 1, p. 375-386.

Dawsey, Cyrus B.; Dawsey, James M. *The Confederados: old South immigrants in Brazil*. Alabama: The

-
- University of Alabama Press, 1995.
- Dunn, Ballard S. *Brasil, the Home for Southerners; or, A Practical Account of What the Author, and Others, Who Visited That Country, for the Same Objects, Saw and Did While in That Empire*. New Orleans: Bloomfield & Steel, 1866.
- Eisenberg, Peter Louis. *A Guerra Civil Americana*. São Paulo: Brasiliense, 1989.
- Foner, Eric. *The second founding : how the Civil War and Reconstruction remade the Constitution*. New York, NY : W.W. Norton & Company, 2019.
- Fredrickson, George M. *The black image in the white mind: the debate on afro-american character and destiny, 1817-1914*. New York: Harper and Row Publishers, 1971.
- Gaston, James McFadden. *Hunting a Home in Brazil: The Agricultural Sources and Other Characteristics of the Country and Also the Manners and Customs of the Inhabitants*. Philadelphia: King and Baird Printers, 1867.
- Genovese, Eugene D. *The World the Slaveholders Made: Two Essays in Interpretation*. New York: Vintage Books, 1971.
- Goldman, Frank P. “Uma tentativa de colonização no litoral sul de São Paulo por imigrantes oriundos do sul dos Estado Unidos após a Guerra Civil”, *Revista de História*, 14 (29), 1957, 3-20.
- Goldman, Frank P. *Os pioneiros americanos no Brasil: Educadores, sacerdotes, covos, e reis*. Tradução pela Olivia Krahenbuhl. São Paulo: Livraria Pioneira Editora, 1972.
- Griggs, William Clark. *The Elusive Eden: Frank McMullan`s Confederate Colony in Brazil*. Austin: University of Texas Press, 1987.
- Gussi, Alcides Fernando. *Identidades no Contexto Transnacional: Lembranças e Esquecimentos de Ser Brasileiro, Norte-Americano e Confederado de Santa Bárbara d'Oeste e Americana*. Dissertação (Mestrado em Antropologia Social) – IFCH, Universidade Estadual de Campinas, Campinas, 1996.
- Gutrel, Matthew P. *American Mediterranean: Southern Slaveholders in the Age of Emancipation*. Cambridge, MA: Harvard University Press, 2008.
- Harter, Eugene C. *A colônia perdida da confederação*. Rio de Janeiro: Nórdica, 1985.
- Hastings, Lansford Warren. *The Emigrant's Guide to Brazil*. New York: Hastings, 1865.
- Hill, Lawrence F. *Diplomatic relations between Brazil and the United States*. Durham: Duke University Press, 1932.
- Horne, Gerald. *O Sul Mais Distante: os Estados Unidos, o Brasil e o Tráfico de Escravos Africanos*. São Paulo: Companhia das Letras, 2010.
- Jones, Judith MacKnight. *Soldado descansa! Uma epopéia norte americana sob os céus do Brasil*. São Paulo: Jarde, 1967.
- Machado, Maria Helena P. T. “Os rastros de Agassiz nas raças do Brasil: a formação da Coleção Fotográfica Brasileira”. In: *(T) Races of Louis Agassiz: photography, body and science, yesterday and today/Rastros e raças de Louis Agassiz: fotografia, corpo e ciência ontem e hoje*, edited by Maria Helena P. T. Machado; Sasha Huber. São Paulo: Capacete, 2010, 34-40.
- McPherson, James M. *Battle Cry of Freedom: The Civil War Era*. New York: Oxford University Press, 1988.

-
- Morton, Samuel George. *Crania Americana: or a Comparative View of the Skulls of Various Aboriginal Nations in of North and South America to Which is Prefixed an Essay on the Varieties of Human Species*. Philadelphia: J. Dodson, Chestnut Street; London: Simpkin, Marchall & Co., 1839.
- Oliveira, Ana Maria Costa de. *O destino (não) manifesto: Os imigrantes norte-americanos no Brasil*. São Paulo: União Cultural Brasil Estados Unidos, 1995.
- Paes, Gabriela Segarra Martins. *Ventura e Desventura no Rio Ribeira de Iguape*. São Paulo, FFLCH/USP, Dissertação de Doutorado, 2014.
- Queiroz, Renato da Silva. *Negros do Vale do Ribeira: Um estudo de antropologia econômica*. São Paulo: Edusp, 2006.
- Ribeiro, Luaê Carregari Carneiro. *Uma América em São Paulo: a Maçonaria e o Partido Republicano Paulista (1868-1889)*. Dissertação (Mestrado em História Social) - Faculdade de Filosofia Letras e Ciências Humanas, Universidade de São Paulo, São Paulo, 2011.
- Rios, José Arthur. “A imigração de confederados norte-americanos no Brasil”, *Revista de Imigração e Colonização*. 9(3), 1949, 3-10.
- Silva, Célio Antônio A. *Capitalismo e escravidão: a imigração Confederada para o Brasil*. Tese (Doutorado em Desenvolvimento Econômico) – Instituto de Economia, Universidade Estadual de Campinas, Campinas, 2011.
- Stampp, Kenneth. *The Peculiar Institution: Slavery in the Antebellum South*. New York: Knopf, 1956.
- Stanton, William. *The Leopard's Spots: Scientific Attitudes Toward Race in America 1815-1859*. Chicago: University of Chicago Press, 1960.
- Sutherland, Daniel E. “Exiles, Emigrants, and Sojourners: The Post-Civil War Confederate Exodus in Perspective”, *Civil War History*, 31 (3), 1985, 237-256.
- Valentin, Agnaldo. *Uma civilização do arroz: agricultura, comércio e subsistência no Vale do Ribeira (1880-1880)*. 2006. Tese (Doutorado em História Econômica) - FFLCH, Universidade de São Paulo.
- Wood, William Wallace. “Ho! For Brazil.” *The Livingston Journal*, July 21, 1866.
- Woodward, Comer Vann. *The Burden of Southern History*. Baton Rouge: Louisiana State University Press, 1960.
- Zorzetto, Alessandra Ferreira. *Propostas Imigrantistas em Meados da Década de 1860: A Organização de Associações de Apoio à Imigração de Pequenos Proprietários Norte Americanos - Análise de uma Colônia*. Dissertação (Mestrado em História Social) – IFCH, Universidade Estadual de Campinas, Campinas, 2000.
- ケネス・M・スタンプ著、疋田三良訳（1988）『アメリカ南部の奴隷制』彩流社
 中西光一（2020）「南北戦争後のブラジルのアメリカ南部人移民と帰国体験ー彼らの書簡が明らかにしていることー」、『アメリカス研究』第25号、61~85頁
 ジルベルト・フレイレ著、鈴木茂訳（2005）『大邸宅と奴隷小屋 ブラジルにおける家父長制家族の形成 上・下』日本経済評論社

【参考ウェブサイト】

Auburn University Special Collections & Archives Department: <https://www.lib.auburn.edu/archive/find-aid/958.htm> (2021年8月11日)

Virginia Military Institute: <https://archivesweb.vmi.edu/rosters/record.php?ID=1563>. (アクセス 2021 年 8 月 11 日)